南スラウェシでの第二次大戦時性奴隷制の調査について

松野明久（JANNI 運営委員、大阪大学教員）

南スラウェシ・エンレカンへの道

マカッサルから車で北へ約 5 時間。港町パレパレから内陸に入ったところにエンレカン県はあり、そそり立つ山々を眺めながら登っていくとカロシという町に着きます。そこには「インドネシア元兵補協会」の代表を引き継いだダルマウィさんがいて、元兵補とその家族のネットワークを維持すると同時に、元「慰安婦」の女性たちを支援する活動をしていました。「していました」と書いたのは、ダルマウィさんは 2018 年 8 月に突然亡くなってしまったからです。

ダルマウィさんは父親が元兵補で、彼自身は兵補協会の第二世代でした。兵補協会は兵補として働いた際の未払い給与の支払いを日本政府に求める運動をしていました。しかし、ダルマウィさんは代表を引き継いだ後自宅に「インドネシア元従軍慰安婦支援協会」の看板を掲げ、商売で得たお金でサバイバーの支援を始めました。「ここにはたくさん元慰安婦の人たちがいる、ぜひ調べて欲しい」とダルマウィさんから熱心なアピールを受けた私たちは、2012 年、有志で調査チームを立ち上げました。

今は亡きダルマウィさん

人生をまるごと変えたできごと

調査チームを待ち受けていたのは驚くべき状況でした。すでにダルマウィさんたちは独自調査を行って1,696人に及ぶ日本軍占領時代の性暴力被害者のリストを作っていました。私たちはエンレカン県を中心に南スラウェシ州の各地を訪問して約90人の被害者に会いました。慰安所の場所を教えてくれた男性証言者たちを含めると、面会した人は100人を超えます。

証言の内容もまた驚くべきものでした。子どもの頃路上で捕まって連行されそのまま慰安所に入れられたヌラさんは、家に帰れたけれども「日本人とセックスした女は汚い」などと言われて追い出され、結婚もできませんでした。農作業を手伝って得るわずかばかりのお金でつましく暮らし、正直に生きることを旨としてお祈りを欠かさない人でした。2016年3月に亡くなられました。パレパレにあった日本の綿繰工場で母親と一緒に働いていたチンダさんは、ある時敷地内の別棟に呼ばれ、そこで「慰安婦」にされてしまいました。解放されて家に戻ると両親はすでに亡く、周囲から追い出され、市場で出会った老女と野菜を売りながら生きてきました。その後お菓子作りを始めましたが、今では体も弱って動けなくなり、近所の人の世話を受けながら暮らしています。マカッサル生まれのミンチェさんは子どもの頃、突然路上でトラックに入れられ慰安所に連れて行かれました。6ヶ月後自力で脱出し家に帰りましたが、日本兵に強姦された女性を一族の恥とみなす親戚に耐えられず、家出してしまいました。以来、結婚もせず、住み込みの手伝いをしながら転々として生きてきました。

チンダさん

ミンチェさん

日本軍性奴隷制の被害を語るとき、直接的な暴力だけではなく、こうした人生全体に与えたインパクトの大きさを考える必要があります。精神的にもトラウマが生涯に渡って被害者を苦しめます。戦後結婚できた人でも、聞き取りをするまで夫にも家族にも話したことがなかったという人が大勢いました。

調査によって明らかになったのは軍性奴隷制の面的な広がりです。日本側資料に「南部セレベス売淫施設（慰安所）調書」とそれをもとに作成された「売淫施設に関する調査報告」があり、それらによると同地域に慰安所は少なくとも 30 カ所あり、そこに置かれていた女性の数は 282 名でした。もっともこれは戦後担当者が覚えている分だけを記したものなので本当はもっと多かったでしょう。実際、私たちが知りえた慰安所でリストにないものが 7 カ所ありました。また、南スラウェシは綿の栽培地で、綿布生産を行う日本企業が軍の指示で展開していましたから、そこで働いていた女性も多くいました。チンダさんの例にあるように、工場が「慰安婦」徴用のターゲットになったところもありました。

サバイバー支援

これまでとくに貧困な状況に追い込まれているサバイバーに対してはダルマウィさんが少しずつ支援をしていましたが、それももうできなくなってしまいました。高齢化が進む中、とくに身寄りのないサバイバーには支援が必要です。

ダルマウィさん亡き後、引き継いだ若い人たちはまだ経験も少なく、その活動を支えていくことも必要でしょう。今「慰安婦」問題は国際問題に発展しています。韓国のみならず、中国、台湾、フィリピン、東ティモールの団体が連携を深めており、彼らにインドネシアのサバイバーたちも繋がっていかなければなりません。JANNI は解散してしまいますが、この問題はこれからも続きます。今後も暖かいご支援をよろしくお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2018 年度 JANNI 会計の決算により生じる次年度への繰越残高から、解散のための清算業務に必要な経費などを差し引いた残額を、５人のメンバー（うち４人は JANNI 運営委員）から成る調査チームによるこのサバイバー支援活動の経費として寄付することを運営委員会では検討しています。本来ならば会員総会による議決をお願いすべき事項ですが、事務局の手間不足などのために総会を開催するのは難しい状況です。会員の皆様にはホームページなどにより 2019 年度の最終会計報告をさせていただくことを条件に、この寄付を事前にご了承くださるようお願いいたします。

（JANNI 運営委員会代表　加納啓良）